科学研究費助成事業（基盤研究（Ｓ））公表用資料
〔令和３(2021)年度 中間評価用〕

令 和 元 年 度 採 択 分
令和３年３月３１日現在

社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓

The Origin and Evolution of Sociality: Developing new theories of human evolution based on collaboration between anthropology and primatology

課題番号：19H05591

河合　香吏（KAWAI Kaori）

東京外国語大学・アジア･アフリカ言語文化研究所・教授

研究の概要（４行以内）
人間を含む霊長類の多くはさまざまな様態で群れ集い、平和的に、あるいは敵対的/競合的に、他者と共に生きている。中でも人間は極めて多くの個体の共存を実現している。それを根底で支える人間に特異な社会性のあり方について、地域、文化、そして種をも超えて比較研究をし、「われわれはどこから来て何者でありどこへ向かうのか」という人類学の究極課題を問い直す。

研　究　分　野：人類学
キ　ー　ワ　ー　ド：社会性、人類進化、人類学、霊長類学、学際的研究

１．研究開始当初の背景

人間のさまざまな特性を「進化」の枠組で研究することは、今日、多くの学問領域で進められている。生物学的な基礎の上に成り立つ学問分野だけでなく、人文社会科学系の学問分野においても新たな視点で進化が語られるようになってきた。そうした中で、本研究ではフィールドにおける社会性の実態に関するデータを中核とする実証的研究と、種間および種内集団間の比較と、より広い学際的共同研究による統合的研究を展開する。

２．研究の目的

本研究の目的は「社会性」を鍵とした新たな人類進化理論の構築にある。そのために、人間の諸社会を対象とする生態/社会/文化人類学と、人間と系統的に近縁な野生霊長類の諸社会を対象とする霊長類社会/生態学という 2 つのフィールド系学問の協働を軸に、比較認知科学などの実験系や古人類学などの自然人類学系、理論生物学などの理論系といった隣接諸学との対話を重視しつつ、学際的な共同研究を推進する。

３．研究の方法

本研究の組織は調査研究班の人類学クラスターと霊長類学クラスター、そして総括班の理論/方法論構築クラスターの 3 クラスターから成る。研究方法は、(1) 定例研究会、(2) フィールド調査、(3) 成果の発信/公開を 3 本柱とする。(1) は本研究の核となる共同研究会であり、フィールドデータに基づく研究報告とインテンシヴな議論により理論的側面を発展・深化させる。また、ゲスト講師から隣接分野の最先端の知見を得るとともに、学際的な討論を展開する。(2) は本研究の基盤となる一次データ収集のために不可欠の場である。主として調査研究班の両クラスターがおこなう (3) はホームページ上での研究活動の発信、シンポジウム等の公開研究集会の開催、成果論文集の刊行等をおこなう。企画･運営は総括班が担当する。

４．これまでの成果

上記、3 つのクラスターごとの成果を記す。

①人類学クラスター：研究期間後半における本格的なフィールド調査の基礎となる研究成果を発信した。本研究では人類と人類以外の霊長類（以下、霊長類）を共通の基盤で調査・研究することを目標としており、従来の人類学の理論的枠組みでは不十分である。そこで、霊長類学との共通の理論的な枠組みを整備することに努力を傾注した。具体的には、言語や文化、社会、規約、制度、互酬性など、これまで人類の社会性について考えるうえで暗黙の条件になってきた前提を一旦

は保留してフィールド調査に臨み、むしろ、それらがどのような論理的な必然性から生じるか、その過程をフィールドという「実験」の場で探究するために必要な理論的な枠組みを構築した。とくに「ともに食べる」という共食現象へ注目することの有効性を明らかにし、その理論的な枠組みを霊長類学との接合に向けて拡張しつつ、人類学の理論に新たな方向性を提示した。

②霊長類学クラスター：研究期間後半に本格的に実施するフィールド調査の基礎となる概念的、方法論的枠組みを構築、発信した。まず、霊長類学における「社会性」という語の使われ方と社会性概念をレビューし、続いて類人猿でない「ふつうのサル（ニホンザルなど）」において多様な社会交渉の「型」が実現することを明快に示し、「ヒト優越主義」ではない社会性の種間比較の道筋を開いた。さらに死、障害、ジェンダーといった、もっぱら文化社会人類学等、人文社会科学の対象であった社会性をめぐる諸概念を霊長類で扱う上で、生物学的/医学的な現象にかぶさる社会的装飾は霊長類にも見出しうるが、そこに切り込むには霊長類を「経験する主体」として捉える必要があることを明示した。これを踏まえ、言語による「質問」ができない霊長類を対象とするとき、観念論に陥らず、自然科学的な観察手法で客観性を担保しつつ、彼らの主観と経験に接近する糸口を検討した。その結果、サルとヒトの相互作用の場面、サルを観察する研究者の焦点化、集団で遊動する際の各個体の生物学的要求（空腹等）の差異に起因する葛藤などへの着目が有効であることを示した。以上の理論的前進は内外の霊長類社会研究の新たな潮流となりうる斬新な成果である。

③理論/方法論構築クラスター：社会性の成立における生物学的基盤と文化社会的環境との相互作用に直結する個体発達と出生とに関する研究を展開した。比較発達心理学分野では社会性の発達的起源に関する一連の実験研究の成果を公刊し、とくに空間的な上下配置と社会的「優位性」とが生後 12 カ月児においてすでに結びついていることを示す実験研究（Meng, et al, 2019）は、英国王立協会誌に掲載された。また M. Tomasello の主要著書、“*Natural History of Human Thinking*”の邦訳『思考の自然誌』を上梓した。自然人類学分野では、社会構造に影響を与える人口構造を把握するため縄文人集団と弥生人集団の人口構造を復元し、社会性の進化を出産の面から考えるため広く霊長類の出産状況と骨盤形態の観察をおこなって大型類人猿の骨盤（仙腸関節部）にも難産のヒトに類似した出産痕が見られることを発見し、人口構造の復元に必須の年齢推定の精度の向上のため回帰木分析という新手法を用いた方法を開発し、さらにその精度の向上のために AI を用いた基礎研究として歯を用いた研究を開始した。いずれも方法論的に高いオリジナリティを有する成果である。

５．今後の計画

2021 年夏中に COVID-19 をめぐる状況が改善に向かうと想定し、(1) 対面ないしオンラインにて定例研究会などの非公開の研究会の開催を継続する、(2) 海外渡航が可能となり次第、速やかに海外フィールド調査を再開する、(3) 成果の発信/公開として、シンポジウムや公開講座など公開の研究集会を開催し、方法論に関する中間成果報告の図書及び最終成果論文集を刊行し、国際的発信として国際ワークショップないしシンポジウムを開催する。なお状況が改善に向かわない場合は、海外フィールド調査の代替措置として人類学では国内の新しいフィールドの開拓、霊長類学では国内の野生ニホンザルや動物園の霊長類の観察等に方法を切り替える。

６．これまでの発表論文等（受賞等も含む）

Meng X., Nakawake Y., Nitta H ., Hashiya K., Moriguchi Y. Space and rank: Infants expect agents in higher position to be socially dominant. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences*, 286: 20191674, 2019.

河合香吏（編著）『極限：人類社会の進化』京都大学学術出版会、578 頁、2020。

足立薫「極限としての＜いきおい＞：移動する群れの社会性」『極限：人類社会の進化』河合香吏（編）京都大学学術出版会、pp. 23–45、2020。

大村敬一「極限のオントロギー：イヌイトの生業システムと近代のシステムにみる人類の社会性の進化史的基盤」『極限：人類社会の進化』河合香吏（編）京都大学学術出版会、pp. 77–102、2020。

杉山祐子「ヒト的な様態としての調理加工の共同と生存：食が社会にひらかれるとき」『極限：人類社会の進化』河合香吏（編）京都大学学術出版会、pp. 479–503、2020。

中川尚史「現生霊長類の群れが生存できる環境を推定するモデルからアルディピテクス・ラミダスの生息環境を探る」『極限：人類社会の進化』河合香吏（編） 京都大学学術出版会、pp. 505–531、2020。

7．ホームページ等

URL：https://sociality.aa-ken.jp